

八幡労働下宿

H.Y

ま え お き
労働下宿は北九州におけるアンコの就労形態のうちで代表的なものである。

八幡の駅前から市電通りにかけて「作業員募集、日鉄構内、土方、三八〇〇円内外、誰にでも出来る簡単な仕事・健康保険・」(写真参照)などのはでなステッカーがびっしりはってある。

そういった中で最もケタオチであるというので有名な高田下宿に入った(九州産業でいっしょに働いたアンコから高田だけは行くなと忠告をうけていたが)。

春の町一帯は昔から労働下宿の集中していた所であり、いっしょに高田で働いた人で、ずっとこの辺でアンコをやってきた朝鮮人労働者は「一〇年前頃までは、春の町は下宿であふれていて、店も多く、にぎやかだった」と話していた。

現在では、その中でも代表的なものだけが六、七軒(岡田、駒井、高田、池浦、草野、矢野など)が残っているだけで、春の町の市電通りを折れて、小さな路地をたんに歩くと、平山、金城などのすてにつぶれた下宿や、たおれかかった廃家がならんでいる。朝鮮人集落もあり、労働下宿はこんな中に存在する。

労働下宿の歴史

労働下宿の形成は鎌田氏が「死にたえた風景」(ダイヤモンド社刊)の中で「労働下宿は明治三〇年代の官営製鉄所建設当時に、まず「千人小屋」として出現し、その後製鉄所の労働政策によって助長、完成させられたものである」と述べているように、八幡製鉄所が拡大して

行く過程で再編成を重ねて今日に至っている。

現在職安法の網からぬけるために「正式」には、駒井、岡田下宿は「山九運輸機工の寮」として、高田下宿は「日鉄港運寮」として営んでいるが本質は変っていない。

高田下宿に入った

私が入った高田下宿は、下宿を始める前は裁判所の書記官をやっていたが、その当時日鉄運輸の事件を受け持ったことをきっかけに、書記官をやめたあと、日鉄から仕事をもらい下宿を始めたという。

一〇年前までは、日に延べ人数が一万数千人というおどろくほどの人夫を出していたとか。その時は昼夜三交代で一つのフトンを使い、昼一疊に一日三人が寝るといふすさまじさである。しかしその後、ハシケ、汽船の合理化や、数々の高田下宿内での殺傷事件などで、年前から日鉄の仕事が取れなくなっている。

高田は、駒井や岡田が山九の下で一定近代化に成功したのに対して、日鉄のそれに乗りおくれたのである。現在下宿している人数は、三、四〇人で、「通り」を含めて五〇人ほどの人夫を毎日出しているが、仕事の内容は、製鉄所内の「緑化」とか、くされ職で取ってきた陸軍のかたづけ仕事のようなはんばいものが多い。

高田下宿の条件

デズラ……三五〇〇円(これは全くの口約束であり、支払いの時はいくらになるかわからない。私の時も二九〇〇円というおどろく数字が出てきた)

下宿代……朝・夕のメシ代六〇〇円、弁当代二〇〇円、この中に光熱費、フトン代も含むのでしめて八〇〇円。

上げ銭……仕事に行く時は朝五〇〇円、帰ってから五〇〇円、計千円が支給され、みんなはこれを上げ銭と呼んでいる。

結局一日のデズラから一八〇〇円を引いたものがあと払いになる。支払いは一五日後二三日払い、月末じめ七日払いである。しかし、あとから下宿の労働者に聞いて分ったのだが、下宿代と上げ銭は、しめをすぎて支払い日までの分を、先に引かれるため、入った少しの間はマイナスになってしまい、出られないのである。それでも下宿を出るなら「金を払ってから出て行け」ということになるのだ。

朝五〇〇円、夕五〇〇円の上げ銭は、アンコがこまっているから支払われるのではなくて、持ち金を完全に使用させることになった。金をためれなくすれば、ケツワリ

しないから。たとえ、少しの間がまんして支払い日にプラスになったとしても、一方的に下げられるデズラではスズメの涙である。しかも七日分がいつも未払い分として残り続ける。

高田としてはアンコがトンコしてももうかるし、おとなしく働けば、なおもうかることになるわけだ。

暴 力

タコ部屋の運営には暴力が必要だ。高田下宿は昨年一月に、下宿アンコを一人殺している。

原因は金のことに関する帳場とのごたごたで、帳場が古い奴をおおりに、古い奴(常備)が直接手を下したものである。

殴る、けをの小さな暴行は日常茶飯事だ。私のいる間も、日通に行っている常備(この高田で長く働き、みこまれたものは日通の直行となり、日通の服も支給されて、ボーナスも出る)が、さぼって仕事にいかなくなったため一二、三発ぶん殴られているし、朝気分が悪くて出ない者がいると帳場が二階にかけ登ってカッを入れてくる。純粋な人夫出しなので、一人も休ませない。

日頃のおどしで、下宿人はみなうちひしがれ、小さくなっている。暴行現場に居合わせても背を向けて見ぬふ

りをするし、みんなの会話の中でも決して高田の悪口が出ない(たいがい、現場にいけばデズラの話がでるものだが)、でも個人的に話すとは本心を言う。

私と一日だけ同じ部屋になったまさんは「ここはタコ部屋じゃけん長うおる所じゃない、わしも支払い日に逃げる」と言っていた。これがみんなの本音であろうが、日通に行っているような常備になると、前年の殺しの時に現われたように、何かあるとすぐオヤジの方につく。

手配師と仕事

高田下宿の人夫供給ルートは少し前までは小倉、博多などで手配師が「タコ」釣りをして入れていたらしいが、(こちらでは手配師のことを「タコ」を釣る「釣り師」と言われる)現在は不況で仕事がないため、高田の悪さを知らない不幸な者がステッカーを見てどんどん入ってくるのである。

私が入る時、帳場で話していた三〇分くらいの間に七人もがたずねてきた。下宿での生活は、朝七時前に帳場が起しにきてとび起き、一階の土間に行き、くそまじいメシをくそまじいミソ汁で流し込む(古いやつは下宿で食わないで外で食べるが金は同じに取られる)。

帳場に現場のわりふりをさせ、人夫出し先のマイクロボ

パスを持つ。その間に五〇〇円もらっておき、仕事から帰って五〇〇円をもらい、帳場の前を通って外に出る。そして銭をつかい果してから帰り、よごれて鉄板のように重いフトンの中に入っている。このくり返しである。仕事は三種類した。

- (1) 日明ふ頭の市場建設のかたづけ仕事。岡崎工業↓藤工務店↓望月組↓高田。

おどろいたことに、高田からいった一三人のうち半数以上がよぼよぼのじいさんである。この足のもつれるじいさん達は、高田下宿にもう何年もいる人達で、長い人は二〇年もいるそうだ。彼らは高田に骨までしゃぶられて、もうどこにも行けないような体にさせられている。高田にしてみれば、働らけなくとも一人頭に変わりなく、若い者と組み合わせて仕事に出し、死ぬまでしぼりとるのだ。

- (2) 新日鉄戸畑製鉄所構内の線路についたノロを起し、すてる仕事。

製鉄↓奥村↓北九州緑化↓藤永産業↓高田。

ここでは、一応ツルとスコを使える者をそろえていた。北九州緑化の手で来ている者はデズラが五五〇〇円で、藤永↓高田↓下宿人の間に二二〇〇円のピンハネ。

(3) 旭ガラス北九州工場のスチベ(荷役)。

旭ガラス↓山九↓藤永↓高田。この日は雨で仕事はしなかったが、藤永の手には五五〇〇円出ていた(頭収書を見る)。高田が二〇〇〇円ピンハネしたことになる。

ケツワリ

私はある日数働いたうえで帳場に「やめるケン、清算してくれ」と言いに行った。以前私の部屋にいた青、らきたSさんが「清算して下さい」と帳場に行き、急にドスをきかせた声になって「そんなもん払えるわけないやるー」と追い出された所を見ているし、高田のやり方は分っているので帳場の出方を計算して出た。帳場のほかにあと一人常備がいた。「急に言い出してからに、そんなこと出来るわけないやるー」とテレビを見たまま言った。常備も私を敵対的な目で見ると「そこを何とかやって下さいよ」としたてに出てお願いしてもテレビを見るふりをして何も言わなかった。

そこで「働いた金をもらうのは当然だろー」と言うのと、頭に来たらしく「なにいいー」と言いながら、今にもおんなぐらん勢いでとび出して来た。やつもさすがに手を出さず、私ももう一声言うことが出来なかった。その

場はおさまり、帳場も中にもどった。そこへ社長（くそババ）の娘（これもババ）が入って来て、「支払日は入る時に言ったやないか」「青森のSさんが清算してくれと言ったら追い帰したやないか」「うちは、やめた人には金を返ることにしてる」「青森の人にも送ったんか」「今送りゃ文句ねえじゃろー」「金を送るため入る時に住所を聞いてるんよ」等々、しらじらしい能書きをならべた。娘が帳場から出て行き、社長のババとヤー公風の常備が二、三人入ってきて「立てんようにしてやる」「いてこまずぞ」とおどしをかけてきた。

おれが動かないのを見て、ババは「あんた、基準局に行っても、一週間は待ってくれるよ」と先手を打っておいて、「内金なら払ってやる」というので、「金が全部もらえるなら、それでもいい」と計算してもらおうと「一人五〇〇〇ずつ内金として払ってやる。残りは五〇〇〇円くらいだから、あとから送ってやる。住所をおしえろ」と出てきた。

おれが計算しておいた金額とかなり違うので、「デズラはいくらになってる」と聞くと「望月が二九〇〇円、藤水が三二〇〇円じゃ」という。「そんなバカな、おれらあ三五〇〇円が入るとるぜ」「上からそれしかおらんかったんや、仕事が少ないケン、みんなを仕事に出すと

安うなる」「みんな同じじゃケン聞いてみる」とか、たき込むように言ってきた。

結局、「そんな金は受け取れん」「出る所に出て全額取ったる」「あーそうせえ、金は二二日来んと絶対払つたらんけん、そう思え」ということで、いったん高田を出る。

次の朝、基準局に行つて「高田の賃金未払いで来た」と言うのと、役人は「高田？ 高田工業のこと？」「ちがう春の町の下宿の高田だ」「下宿？」とか言つてとぼける。「元請は」と聞いたので「そりゃ新日鉄ですよ」「いや、その下が元請になりますネエ」と最初から逃げ腰である。「とりあえず話を聞きましょう」と、未払い、条件違反、ピンハネ、人夫出し、暴力事件等詳しく記入したあとで、未払いについては「七日以内に払え、法律違反ではないので七日後に来て下さい」「暴力事件については「告発・告訴の方法があります」と全くやる気がない。

そこで「高田のような純然たる人夫出し業者が先程のいわゆるまっとうな『使用者』にあたるのか」とたずねると、実はそうなんですといのんばかりに、職安法を取り出して、この問題はそれとの関係があることを認める。今回都合よく藤水の手が五五〇〇円もらってるのを見

ているので、その件をもって「業者からいくら出てるのかはつきりしなければ清算も出来ない、業者は本人払いが原則はずだ」とくいきがった。

「その件と関連して捜査を進めるのは当然だが、関係官庁とめんみつに検討してやるため時間がかかる、とりあえず高田との事件の三五〇〇円を取りましよう」ときた。一筋縄ではいかぬと見て、金をとってやればあとはうやむやに出来ると思つたのだろう、すぐ金を取る方向に動いた。

おれとしても元請から金を取ることも出来、が、帳場の顔がどう変化するか見たかったので、高田に取りに行くことにした。電話で社長が出て、全額出すことを了解した。役人は最後に「気の衰らぬうちに取りにいったほうがいい」と言い出す始末である。

少したつてから帳場に行つたら、夜が酔っぱらつておいた。やけ酒だろう。おれに気が付いて「お前どいだけ厚かましいやっちゃ何時まで待たせる」「何時来よう」と関係ないだろう。「なにおー」とまたおどしが始つた。「殴るなら殴れ、事は大きくなるだけだぞ」と一本取ると、「まあいいやあー」と金を払った。

明細書を見ると全くでたらめで、同じ仕事をしながらデズラまで違うのである。「これは労務署の言う合計と

帳じりを合わせるためか」と聞くと、たじろぎながら「そうせんとしやないじゃろー」と言うのでもうバカバカしくなつて来て引き上げた。出る時、「こんなタコ部屋つぶしたるからな」とすてゼリフを言つて高田下宿を出た。

(編集部註) これは四九年春に書かれたものですが、この特集に合わせて、本人の了解を得て発表させてもらいました。

注(1) 賃金は、四九年三月頃まで三五〇〇円、五〇年一月に三八〇〇円となり、五一年一〇月から四〇〇〇円になっている。下宿代はそのまま八〇〇円で、弁当代の二〇〇円に現物になっている。上げ賃はそのまま変動ありません。下宿は原稿当時より若干減つており、現在では三〇名ならずで、通いまで入れて五〇名と推定されている。

注(2) 文中に出てくる「九州産業」という会社、これは完全な人夫出しのところ、系列は新日鉄↓山九運輸↓中村汽船↓岡田下宿↓九州産業となつており、飯塚から炭鉱職者（生活保護受給者がほとんど）をマイクロバスを使って送迎している。飯塚ヤクザ↓太州会の経営。